

(1) 北杜市立中学校の再編整備に関わり検討する視点について

北杜市の中学校の小規模校の現状を踏まえ、その「よさ」を認めつつ、「課題」を改善し、北杜市で学ぶ中学生にとって、『より適切な学校の教育環境を整える』ことを重点に検討してきた結果、今後の北杜市の中学校の再編整備の方向性を以下のように集約し、その内容を各小中学校PTA保護者、教職員を対象に説明会を実施しました。

- ① 「水平統合による一定の学校規模」に統合することが望ましい。
- ② 「学年3～4学級程度が実現できる学校規模」が望ましい。

各小中学校の説明会への参加者は、およそ650名、当日いただいた質問や意見に加え、各家庭に事前に配付した説明資料をもとに寄せられたものも含め、様々な質問、意見が寄せられました。

今回は、検討委員会の基本的な方向性を理解していただくことを主に考えたため、統合に関わる質問や考えを自由に記していただき、賛成・反対等の明確な回答は求めています。しかし、意見の中から読み取れる傾向として、明確に統合に賛成する記述が5～6割、反対が約1割、明確な賛成・反対等の記述がないものが2～3割という状況でした。次に、統合に賛成の方の内容ですが、水平統合を望む意見が約7割、垂直統合約0.5割、組合せ統合約0.5割、約2割は明確に統合方法に触れていないという状況でした。

今回の説明会では、保護者や教職員から様々な質問や意見を伺いました。(資料2) それらを基に以下の6視点を中学校の統合の具体的な案を検討していく上での基本的な考え方とし、今後、11月に行われる地域での説明会における意見等も踏まえる中で、次回以降の検討会において、本日の6視点に基づいて、市内8中学校の統合の学区等に関わる方向性について、検討をしていきたいと考えております。

中学校の再編整備に関わり検討する6視点

- 《視点①》 「生徒の教育環境」の視点（人間関係の広がり、学習集団、部活動など）
- 《視点②》 「学校の教育指導」の視点（教員配置、組織的指導、行事活動など）
- 《視点③》 「生徒の通学」に関わる視点
- 《視点④》 「学校と地域との関わり」の視点
- 《視点⑤》 「学校施設・設備」の視点
- 《視点⑥》 「移住される方」の視点

(2) 「生徒の教育環境」の視点について

視点①②については、「生徒を取り巻く教育環境」、「学びを保障していく教育指導」の視点であり、今回の再編整備の必要性を示す最も重要な視点であると考えています。

《視点①》 「生徒の教育環境」の視点（人間関係の広がり、学習集団、部活動など）

(ア) 「生徒の人間関係に関わる環境」を整える。

【現 状】

保育園から小学校卒業まで長い場合は12年間、少人数の単学級集団の中での人間関係が継続する。

- ・人間関係が固定化し、関係が崩れ修復が難しい場合には、居場所がなくなる。

【改善の方向性】 ○：改善内容 □：配慮事項

- 複数の小学校から進学することにより、「リセットする」「継続する」を選択できる環境
- 「新たに人間関係を広げる」「より多様な個性と出会う」機会ができる環境
- 進級に伴うクラス替えにより、「人間関係の固定化を解消」できる環境
- 入学の際、新たな人間関係を築くストレスに対応した支援や配慮が望まれる。

(イ) 「生徒の学級・学習集団に関わる環境」を整える。

【現 状】

過半数の学校で学年単級であり、学級15人程度～40人と少人数から多人数までの偏った学級・学習集団となっている場合がある。

- ・単級少人数の場合、20人以下の学年生徒数で、同性は10人以下（数名の場合も）となり、生活場面においても、学習場面においても広がりが持ちにくい。
- ・県のはぐくみプランは35人を超えると学級増となり、1.5人の教員が配置となる。しかし、単級36～40人の場合、学級は1クラスで0.5人の教員配置となる。単級で生徒数40人の学級もあり、教室環境、学習環境が適切でない状況がある。（小規模校の多人数学級）

【改善の方向性】

- 学年複数の学級編成ができる規模により、「21人～35人の範囲での学級編成」となる環境
- 学習内容によっては、「学級を超えた学年集団」としての広がりのある学習が行える環境
- 複数の学級による「学年組織活動」が行える環境

(ウ) 「生徒の部活動に関わる環境」を整える。

【現 状】

小規模校であることから、生徒数、顧問数の関係から部活動の設置数が限られ、希望する活動ができない。

- ・他校と合同部活動を実施している場合にも、平日の活動は制限されたものとなる。
- ・今後、部活の地域移行もあるが、当面は休日のみの限られた移行である。

【改善の方向性】

- これまで多くの学校で実施してきた部活動の中から「希望する活動を選択」できる環境
- 多様な個性、技能を持つ「多くの生徒との関わり」を持ちながら活動できる環境

(3) 「学校の教育指導」の視点について

《視点②》 「学校の教育指導」の視点（教員配置、組織的指導、行事活動など）

(ア) 「教員の教科指導・生徒指導に関わる環境」を整える。

【現 状】

学級数が少ない小規模校であることにより、県費教職員の配置が6～13名程度である。

- ・9教科10科目に対して、免許保有教員が配置できず、専門的な指導ができない。
- ・時数が多い主要教科も1名の配置で組織的な指導ができない。（個人の力量に左右される）
- ・教員と生徒の関係が親密であるが、固定的な関係や指導になりがちである。

【改善の方向性】

- 教員配置が少なくても15～19名程度となるようにし、「全教科への配置」、「主要教科への複数配置」が可能となり、最低限の指導体制が整えられる環境
- 全教科の教員配置により日常的な教科指導を通して、「生徒の個性に応じた指導」ができる環境
- 教科担当が複数であることにより、多人数学級を2クラスに分けての授業、複数教員のティーム・ティーチングによる授業など、「生徒の実態に応じた指導体制」が工夫できる環境
- 多様な教員との関わり、組織的な生徒指導など「生徒の個性に応じた指導」ができる環境
- 教員同士が日常的に学び合う機会が持て、研修が深められ、「資質の向上」が図られる環境

(イ) 「学校行事、生徒会行事等に関わる環境」を整える。

【現 状】

過半数の学校で学年単級の全校で3学級、全校生徒数が50人～100名程度であり、ほとんどの学校で小学校から継続した人間関係の中で行事活動や生徒会活動が行われてきている。

【改善の方向性】

- 新しい人間関係や複数の学級構成により、多様な見方・考え方の中で互いに認め合い、刺激し合い高め合える環境
- 生徒数が多くなることにより個々の個性が埋没することがないような関わり合い、個に応じた指導・支援が望まれる。

《視点①》《視点②》の【改善の方向性】を踏まえ、

「水平統合による学年3～4学級程度が実現できる学校規模」に統合することが望ましい。

しかし、この水平統合に関わり、主に「通学」「地域との関わり」「学校の施設・設備」「移住される方」の視点で、保護者・教職員から質問や意見が寄せられた。

(4) 「生徒の通学」に関わる視点について

《視点③》 「生徒の通学」に関わる視点

(ア) 「生徒の通学に関わる環境」を整える。

【現 状】

① 通学手段別生徒数 ※中学生回答者数 837 名（甲陵中を除く中学生 964 名） ※表中（ ）内は割合%

	徒 歩	自 転 車	公共交通	送 迎	スクールバス	その他	計
明野中	23(34)	26(39)	0	18(27)	0	0	67
須玉中	25(28)	50(57)	1(1)	5(6)	5(6)	2(2)	88
高根中	43(22)	60(31)	7(4)	24(12)	59(31)	0	193
長坂中	71(49)	6(4)	6(4)	20(14)	42(29)	0	145
泉 中	37(35)	29(27)	2(2)	9(8)	29(27)	0	106
小淵沢中	57(38)	74(50)	0	18(12)	0	0	149
白州中	15(38)	18(46)	0	6(15)	0	0	39
武川中	7(14)	24(48)	0	19(38)	0	0	50
計	278(33)	287(34)	16(2)	119(14)	135(16)	2(0.2)	837

- ・手段別の割合は、徒歩が 33%、自転車 34%、公共交通・送迎・S B が 32%
- ・公共交通やS B を利用している学校は、4 校（須玉中、高根中、長坂中、泉中）
- ・今回は届けている手段での回答としている。実際は送迎の割合がもっと高いと思われる。

② 通学手段別通学距離 ※1 km ごと

(距離km)	～1 km	～2 km	～3 km	～4 km	～5 km	～6 km	～7 km	7 km～	計
徒 歩	127	119	24	3	3	1	0	1	278
自転車	15	52	145	51	16	3	2	3	287
送 迎	9	29	32	11	11	8	7	12	119
その他						2			2
計	151	200	201	65	28	14	9	18	686

	徒歩・送迎 (停留所)				スクールバス・公共交通等							
(距離km)	～1	～2	～3	3～	～4	～6	～8	～10	～12	～14	～16	計
スクールバス	82	12	11	30	48	52	13	11	6	3	2	135
公共交通	10	0	1	5	8	2	2	3	1	0	0	16
その他												
計	90	12	12	35	56	54	15	14	7	3	2	151

※生徒の自己申告によるものであり、正確性に不安がある。 参考：高根中～清里駅 14.3 km 29 分

- ・徒歩か自転車での通学において、2 km 以内が 51%、4 km 以内が 90%、6 km 以内が 96% である。送迎を含め、他学区から通学している生徒は、比較的距離が長くなっている。
- ・S B や公共交通を利用している場合、10 km 以内が 92%、ほぼすべての生徒が 16km 以内（30 分程度以内）の距離の中に含まれている。
- ・S B や公共交通を利用している場合、自宅と停留所の距離が 3 km 以上の生徒が 23% いる。

③ 通学手段別通学時間 ※スクールバス、公共交通は、徒歩等も含む通学時間

	～15分	～30分	～45分	～60分	～75分	75分～	計
徒 歩	152	107	16	3	0	0	278
自 転 車	132	124	29	2	0	0	287
送 迎	88	23	6	1	0	1	119
スクールバス	34	74	24	3※	0	0	135
公共交通	5	8	3	0	0	0	16
計	411	336	78	9	0	1	835

- ・通学時間については、自宅を出て学校に着くまでの時間を回答してもらい、30分以内が90%、45分以内が99%、60分以内が99.9%である。
- ・スクールバス60分以内(※印)の3名の内訳は、バス30分+徒歩25分=計55分(2人)、バス35分+徒歩15分=計50分(1人)である。

④ 生徒の通学の状況 ※管理職から見た各中学校の通学に関わる状況

- ・保護者による送迎が増えている。(始業時刻前、校門付近に車の停車が多い)(1km～3km位でも送迎する家庭が増えている)
- ・学区外からの通学は、保護者の責任で送迎することとなっているが、自転車で通学している生徒が出てきている。
- ・電動アシスト自転車を使っている生徒がいる。
- ・公共バス利用の生徒で下校時刻とバスの時刻が合わず学校で1時間近く待つことがある。
- ・SBで通学する生徒で、冬季、バスを降りてから自宅まで、暗い中を帰る状況がある。
- ・歩道の整備が十分でない場所やスピードを出す車が多くあり心配である。

【対応の方向性】

① 通学距離、通学時間に関わる一般的な考え方

「公立小中学校の適正規模・適正配置等に関する手引き」(文科省)から

※全国の市町村の実態をもとに、通学条件についておおよその目安が示されています。

《通学距離による考え方》

- ・徒歩や自転車による通学距離としては、小学校で4km以内、中学校で6km以内という基準はおおよその目安として妥当であると考えられます。
- ・その上で、通学路の安全確保の状況や地理的な条件に加え、徒歩による通学なのか、一部の生徒について自転車通学を認めたり、スクールバスを導入したりするなども考慮の上、児童生徒の実態や地域の実情を踏まえた適切な通学距離の基準を設定することが望まれます。

《通学時間による考え方》

- ・適切な交通手段が確保でき、かつ遠距離通学や長時間通学によるデメリットを一定程度解消できる見通しが立つことを前提として、通学時間について、「おおむね1時間以内」を一応の目安とした上で、地域の実情や児童生徒の実態に応じて1時間以上や1時間以内にするものの適否を含めた判断を行うことが適当であると考えられます。

② スクールバスの導入にあたっての基本的な考え方について

今後の中学校の統合にあたり、通学距離・通学時間についての基本的な考え方

(1) 通学距離に関わる考え方

徒歩や自転車による通学距離としては、中学校で6 km以内という基準をおおよその原則とし、これを超える場合には公共交通機関、スクールバス等の導入を検討する。

ただし、地理的状況、地域の実情、生徒の実態や安全の確保等に応じて必要と判断される場合においては必要な措置を行う。

(2) 通学時間に関わる考え方

適切な交通手段のもとに、通学時間においては「おおむね1時間以内」を原則とする。

ただし、個々の実情があることに配慮した上で、生徒の安全の確保、生徒の負担軽減が図られるよう必要な措置を行う。

③ スクールバスの導入にあたっての配慮事項について

- 生徒の通学距離、通学時間に対応した導入
- 運行ルート的高低差、道路状況に応じた検討
- スクールバス運行に関わる安全性の十分な確保
- 停留所の適切な配置と安全性の確保
- 部活動等に対応した運行への配慮
- 降雪時、大雪に対する道路整備等の安全性の確保 など

【参考】 学校間の距離 (単位km)

	明野中	須玉中	高根中	長坂中	泉中	小淵沢中	白州中	武川中
明野中		5.1	11.8	12.2	16.2	20.8	14.5	9.0
須玉中	5.1		8.6	9.0	13.0	20.0	13.1	7.6
高根中	11.8	8.6		4.8	6.9	13.9	13.1	12.8
長坂中	12.2	9.0	4.8		4.9	9.6	8.7	9.9
泉中	16.2	13.0	6.9	4.9		7.5	12.5	13.7
小淵沢中	20.8	20.0	13.9	9.6	7.5		9.9	14.9
白州中	14.5	13.1	13.1	8.7	12.5	9.9		6.8
武川中	9.0	7.6	12.8	9.9	13.7	14.9	6.8	

※15 km : 約 30 分

参考 : 高根中～清里駅 14.3 km 29 分

(5) 「学校と地域との関わり」の視点について

《視点④》 「学校と地域との関わり」の視点

(ア) 「地域と協働関係を生かした学校づくり」に努める。

【現 状】

今年度4月に実施された「全国学力・学習状況調査」の生活状況調査における「地域との連携」に関わる質問項目において、『今住んでいる地域の行事に参加していますか』では、全国38.0%に対して北杜市64.0%(+26.0%)、『地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか』では、全国63.9%に対して北杜市75.5%(+11.6%)という結果であり、これらの項目については、例年全国に比べ高い数値を示している。

このことについては、北杜市の中学生にとって「地域が比較的身近な存在であり、地域と関わるが多く、その関係が強い」ということの表れであろうと考える。

ここでは、「子供と地域」「中学校と地域」の2点から現状を把握したい。

① 「子供と地域」の関わりの現状

(1) 育成会、子どもクラブの現状

□ 市内育成会（子どもクラブ）登録数

計157団体 【活動中114、休会中43】

登録者数 小学生 1,295名/ 約1,800名 (約72%)

中学生 722名/ 約1,000名 (約72%)

□ 中学生への調査（回答総数837人）

所属の有無	所属している	あるが所属していない	ないので所属していない	わからない	計
生徒数	384	111	119	223	837

- ・「所属している」割合は46%、「わからない」を含めると607名で約72%になる。
- ・コロナ禍の関係で、ここ3年ほど十分な活動ができていない影響も考えられる。

(2) 育成会、子どもクラブの活動内容（所属している生徒のみ回答）

○所属している子どもクラブなどの会では、主に以下のような活動を行っている。

	夏のラジ オ体操	清掃活動	町の球技 大会参加	お神輿	旅行・キ ャンプ等	地域の 伝統芸能	廃品回収	施設訪問
生徒数	330	258	198	154	100	50	19	5

○具体的な活動としては、以下の内容のものがあげられた。

【奉仕活動】	・清掃活動 ・ゴミ拾い ・草刈り ・環境美化 ・神社のお参り
【スポレク】	・ドッジビー ・縄跳び大会 ・駅伝 ・ウォーキング ・レク ・グランドゴルフ ・ボーリング ・三世代ゴルフ ・運動会
【体験活動】	・お田植え ・そばまき ・そば打ち体験 ・ピザ作り ・キャンプ ・乗馬 ・練り込み太鼓 ・体験工房 ・お琴教室 ・ふれあい活動
【地域活動】	・お天神講 ・ラジオ体操 ・ジュニアリーダー ・防災訓練 ・どんど焼き ・BBQ ・ほたる祭り ・スズラン祭り ・クリスマス会 ・花火大会 ・旅行 ・山梨県ジュニアドクター
【文化継承】	・巫女の舞 ・浦安の舞 ・虎頭の舞

(3) 北杜市の「子供と地域」の関わり

北杜市の子供たちは、小学生の頃から地域の大人に見守られ、地域社会の育成会等の子供と関わる組織のもとに、子どもクラブ等に所属している子がほとんどであった。しかし、近年子供の数の減少により、子供クラブを休会としている地区が増加、また、子供クラブに所属しない子どもも増加してきている。

現状においては、約7割の子供が子どもクラブ等に所属し、地域の子供たちが小学生から中学生まで、地域行事を通して異学年が交流するとともに、地域活動に参加し、活動をしてきている。このことは、小学生や中学生が地域とつながり、関わる基礎となり、地域社会への意識を高めていくことの大きな要因になっていると考えられる。

また、地域に伝わる伝統芸能等に親の理解のもと、子供たちが意欲的に参加している状況は、地域と子供たちをつなぎ、地域理解を深める大切な要因の一つとなっている。

② 「中学校と地域」の関わりの現状

(1) 学校運営協議会（CS）や地域学校協働活動等における関わり

保護者や地域住民が学校運営に参加、学校と地域の方が目標や課題を共有し、教育方針や教育活動に関わり、実態やニーズに応じた支援等を行ってきている。市内中学校においては令和3年度から導入、令和5年度から全中学校で実施している。

具体的な活動としては、授業を参観し学校の状況を知っていただくこと、学園祭などの行事活動や各種学習会等における参観や講師、指導者としての支援、また、学習支援や環境整備、安全防災などの各部会を設け、具体的な協力をいただいている状況である。

(2) 「原っぱ教育 北杜學」の推進における関わり

総合的な学習における地域学習において、各資料館や遺跡等の訪問、登山、講師を招いて地域の文化・芸能や郷土食の学習、地域の先人の業績を知るなどの活動を通して、学区の町を含め広く北杜市全体を対象に探求的な学習や体験的な学習を行っている。

(3) 各学校における授業、行事活動等での関わり

読書ボランティアやゲストティーチャーとして地域の方に、授業へ参加・協力して頂いたり、職場体験学習や職業講話、福祉講話、スキー教室等への協力を頂いたり、また、学区の特色ある地域教材に協力を得ながら、計画的に取り組んでいる学校もある。

一方、学園祭において、家族が参加できる場面をつくる、学園祭を地域の方に公開するなど、学校理解へとつなげている学校もある。

(3) その他

地域の祭りや体育祭、駅伝などへの参加、また、地域の文化祭等で発表の場を設けて頂き、吹奏楽部や太鼓愛好会が地域に出向いていくこともある。しかし、部活動の関係で休日の地域の活動に参加できない状況もある。また、家庭が地域との関わりを望んでいない場合もあり、生徒への呼びかけが難しい状況も出てきている。

地域の美化活動として、多くの学校で通学路をはじめ、学校周辺や地域の環境美化活動に取り組んでいる状況もある。

【対応の方向性】

① 統合により学区が広がることによる中学校における「学校と地域の関わり」

義務教育段階の特に小学校時代は、地域の人々に見守られ、声をかけられ関わりながら、地域を肌で感じ、身をもって体験、経験することがとても重要であり、この時代の五感を通しての学びは、これから生きていく上での基礎となる力を養ってくれると考える。

地域の実情にもよるが、小学校においては、顔や姿、形が分かる身近な人や物との関わり、それらを活用した学びの重要性を今後も重視していく必要がある。

一方、中学校は、過去には複数の地域、小学校から入学し、地域の広がり、交友関係の広がりの中で学んできた経緯がある。しかし、現在は小学校からそのまま中学校へという地域がほとんどであり、以前のような学びの広がりを持つてなくなってしまった。

水平統合することにより、歩いて通える身近な学校ではなくなるかもしれないが、同じ北杜市であり共通の風土、地域性の中での学び合う仲間の広がり、地域の広がり、中学生に新たな関わりや学びの環境を与えることになり、その可能性を広げると考える。

また、地域はこれまでの我が町の意識を広げ、我が市の視点で学校と関わり、学校とつながる意識を持つことにより、地域同士の関わりやつながりもこれまで以上に発展し、強くなっていくと考える。

つまり、中学校の統合により、地域から学校がなくなるのではなく、新たな関わり、関係性の中学校が生まれることになる。ましてやこれまでの地域から中学生がいなくなることはなく、中学生はこれまでも、これからも地域と共にあり、地域と関わりながら学び、生きていくことに何の変りもないと考える。

② 「子供と地域」の関わり

中学校がどのような形で統合をしても「子供（中学生）と地域」の関わりは変わらない。

③「中学校と地域」の関わり

(1) 学校運営協議会（CS）や地域学校協働活動等における関わり

これまでの各学校の実績を受け継ぎ、継承・発展させていくことになる。学区が広がることに伴い、これまで以上に、学校運営協議会等の必要性が増し、役割が重視されることになる。また、これまでの地域の概念を広げ、中学校区、北杜市を単位として、各地区との関わりを重視していく必要がある。

(2) 「原っぱ教育 北杜學」の推進

学区が広がることにより北杜市全体を地域として捉え、「北杜學」を通じて地域を学び、地域への愛着と誇りを持てる活動を推進していく。そのことは、各地区のよさを再認識し、住んでいる地区の理解を深めることにもつながる。また、複数の地区から中学生が集まることにより、これまで以上に他の地区を身近に感じ、広い視野で地域を捉え、学ぶ機会が生まれる。

(3) 各学校における授業、行事活動等での関わり

各学校のこれまで取り組んできたことを精査しながらも、これまでの関わりのよさを受け継ぎ、地域の広がりをもっと多方面からの協力と支援へと活かし、学習の機会の多様性へとつなげる。また、学校で行われる諸活動は、地域の広がりに対応した活動になるよう配慮していく必要がある。

(6) 「学校施設・設備」の視点について

《視点⑤》 「学校施設・設備」の視点

		建設	大規模 改修	耐震 改修	築年数 (R5)	現在の 普通教室	各学年4クラスの 受入校とする場合
明野中	校舎(教室)	H17			18	8	築年数が比較的浅く、敷地面積も広い ため、校舎は増築を検討。 ただし、プールは築年数が古く現在使用で きないため、建替えを検討。
	校舎(特別)	H8			27		
	体育館	H10			25		
須玉中	校舎 ※	S45	H3	H12	53	8	築53年が経過、現状は学年2クラスが限 度、校舎の建替えを検討。 プールも築49年が経過、現在使用できな いため、屋内プールへの建替えを検討。
	体育館	H18			17		
高根中	校舎 ※	S63			35	13	現状、学年3クラスまでは収容可能、校舎 は増築を検討。ただし、他校に比べるとグ ラウンドを含め校地面積が小さいため、用 地を大きく広げる必要がある。
	体育館	H1			34		
長坂中	校舎	H16			19	9	築年数が比較的浅く、現状で学年3クラス までは収容可能、校舎は増築を検討。ただ し、屋内運動場が小さい点、校地を広げら れるかが懸念点である。
	体育館	H16			19		
泉中	校舎 ※	S53	H4, H14	H14	45	6	築45年が経過、現状は学年1クラスが限 度、校舎は建替えを検討する。 ただし、グラウンドを含め校地面積が小さ いため、用地を大きく広げる必要がある。
	体育館	H14			21		
小淵沢中	校舎	H19			16	6	築年数が比較的浅いため、校舎は増築を 検討。ただし、校地を広げられるかが懸念 点である。
	体育館	H19			16		
白州中	校舎 ※	S54	H13	H13	44	7	築44年が経過、現状は学年1クラスが限 度、校舎の建替えを検討する。また、プー ルも築年数が古く現在使用できないため、 建替えを検討。ただし、グラウンドを含め 校地面積が小さいため、用地を広げる必 要がある。
	体育館	S55		H12	43		
武川中	校舎 ※	S54	H12	H12	44	6	築44年が経過、現状は学年1クラスが限 度、校舎は建替えを検討。ただし、グラウ ンドを含め校地面積が小さく、校地を広げら れるかが懸念点である。
	体育館	S55	H19	H19	43		

※印は、長寿命化改修、または改築が必要な校舎

具体的な状況（校舎）

- ・水平統合で学年4学級を想定した場合、通常学級12、特別支援学級3、支援教室等2、合計17教室程度の普通教室が必要となり、既存の校舎はそのままでは利用できず、増築もしくは新築の必要性がある。
- ・須玉中(築年数53)、泉中(45)、白州中(44)、武川中(44)、高根中(35)の校舎がそれぞれ長寿命化改修または改築が必要な校舎の対象となっている。
- ・統合の方向性が決まらなると上記の学校の改修等の計画が立てられない。
- ・統合による改築、新築は、これから求められる時代に即した教育環境を整備する機会となる。

(7) 「移住される方」への視点について

《視点⑥》 「移住される方」への視点

(ア) 北杜市に移住を考えている方の立場で考える。

【現 状】

これから移住先を検討する際、北杜市の自然環境は大きな魅力であると思われるが、子育て環境、教育環境なども選択の重要な要素であると考えられる。特に、大きな都市で大きい規模の学校を経験している方は、小規模ですべての人の顔が分かる小集団の教育体制、また、身近な地域に小学校、中学校が存在することに魅力を感じる方も多いと思われる。

【対応について】

すでに北杜市に移住された方で小学校や中学校が身近にあることを前提にその地を選んだ方もいるという話を伺った。このことについては、以前からこの地に住んでいる方と同様に、小学校とは異なる中学校の教育環境について理解していただき、通学距離が長くなること等への不安に対しては、今後その対応を説明していく。

これから、移住を検討される方については、まだ具体的な内容が決定していないことから、はっきりとしたことは言えないが、中学校の統合が検討されていること、その内容について伝え理解してもらえようとする。

■ 移住を検討されている方へ伝え、理解していただきたいこと

- ① 小学校については、ほぼ単級の小規模での教育体制であり、身近な地域との関わりを生かした教育活動、地域の方に見守られた教育環境が大きな魅力である。
- ② 中学校については、現状一つの小学校から一つの中学校に進学している状況の中で、成長段階に応じた交友関係や学びの広がり、教育環境を充実させるために、現在、統合の検討をしている。
- ③ 統合に際しては、通学距離が長くなることが想定されるが、スクールバスなどの通学手段が考えられている。

(8) その他